

さて今回は「大切にしたいもの」の続きを書きます。

■日本理化学工業(株)を見学

川崎市高津区の閑静な住宅地の一面にその工場はありました。

もう皆様にもお馴染みの当社は、日本一のチョークメーカーです。

ご自慢は、ホタテの貝殻を使った埃の出ないエコな**ダストレスチョーク**ですが、この商品はクレヨンのような形と多彩な色に加え、濡れタオルですぐ消せるという大変便利な特長があります。

例えば、幼児が窓ガラスにどんなに落書きしても、あとで消せるので、母親が目くじらをたてる必要がありません。また情操教育にもよいとのこと。

この工場は、生産現場12名にうち工場長を除く11名全員が**知的障害者**です(経理や総務は健常者が行っています)。しかし、もしそうした説明なしに工場を見学された方は、きっと彼らが知的障害者であることに気づかないと思います。それほどまでに、ごく普通の中小企業の工場なのです。

なぜでしょう？

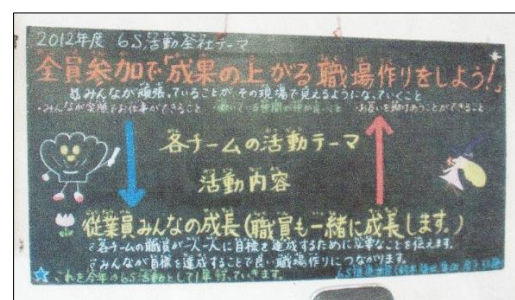
筆者の推測ですが、理由の一つは、障害者用の特別な設備がないからだと思われます。代わりに、**現場のカイゼン**が知的障害者の視点でなされていました。例えば、秤のメモリが読めないので、おもりを使って計量するなどです。

二つ目の理由は、従業員の皆さんの素早い動作です。混練りした粘土を一定の長さにカットする作業、それを焼成用の治具にセットする作業、そして包装する作業などなど従業員の皆さんの動きは実に機敏かつリズムカルです。見学者から「自分はあのスピードについて行けない」の声が聞かれたほどです。

現場の「**6S運動**」については、委員会をつくり班長、副班長などの役割りを決めて組織的に活動しておられましたし、各自が自分の目標を紙に書いて壁に掲示もしていました。

今回何よりも印象的だったのは、従業員の皆さまの活き活きとした目の輝きです。

大山会長のお話の通り、仕事を通して社会に役立てることが生きがいになっているのですね。そのような働きやすい環境や仕組みを作ってこられた経営のご努力に深く感銘しました。 以上



行動指針 (2026.4.6 当社ホームページから)

- 1 私たちは、全従業員の物心両面の働く幸せを守り、さらに高めていきます。
- 2 私たちは、永続的な幸せを感じ続けるために、自らの人格を高めていきます。
- 3 私たちは、感謝の心を忘れず、相手の役に立つことを行っています。
- 4 私たちは、周利槃特(しゅりはんどく)のごとく、自らの役割に真剣に取り組めます。
- 5 私たちは、周りの人の成長に役立つことで、自らの成長を追求していきます。
- 6 私たちは、現状に満足せず、常に報連相を通じ自己の成長をはかりながら、毎日の創意工夫を積み上げていきます。
- 7 私たちは、日々の活動ではPDCAを遵守しながら目の前の目標を達成し続けることにこだわります。

『日本でいちばん大切にしたい会社』

坂本光司 あさ出版

社員の七割が障害者の会社

(1) 従業員五〇名のうち、およそ七割が知的障害を持った方々で占められている神奈川県川崎市のその会社は、多摩川が近くに流れる、静かな環境の中にあります。

この会社こそ、日本でいちばん大切にしたい会社の一つです。昭和十二年（一九三七）に設立された「日本理化学工業」は、主にダストレスチョーク（粉の飛ばないチョーク）を製造しており、五十年ほど前から障害者の雇用を行っています。

(2) そもそものはじまりは、近くにある養護学校の先生の訪問でした。昭和三十四年（一九五九）のある日、一人の女性が、当時東京都大田区にあった日本理化学工業を訪ねて来たそうです。

「私は養護学校の教諭をやっている者です。むずかしいことはわかっておりますが、今度卒業予定の子供を、ぜひあなたの会社で採用していただけないでしょうか。大きな会社で障害者雇用の枠を設けているところもあると聞いていますが、ぜひこちらにお願いしたいのです」障害者を持つ二人の少女を、採用してほしいとの依頼でした。

社長である大山泰弘さん（当時専務）

は悩みに悩んだといえます。

(3) その子たちを雇うのであれば、その一生を幸せにしてあげたいといけない。しかし果たして今のこの会社には、それだけのことができるかどうか……。そう考えると自信がなかったのです。

結局、「お気持ちちはわかりますが、うちでは無理です。申し訳ございませんが……」

しかしその先生はあきらめず、またやつて来ます。また断ります。またやつて来ます。それでも断ります。

三回目の訪問のとき、大山さんを悩ませ、苦しめていることに、その先生も耐えられなくなったのでしよう、ついにあきらめたそうです。しかしそのとき、「せめてお願いを一つだけ」ということで、こんな申し出をしたそうです。

「大山さん、もう採用してくれとはお願いしません。でも、就職が無理なら、

(4) せめてあの子たちに働く体験だけでもさせてくれませんか？ そうでないこの子たちは、働く喜び、働く幸せを知らないまま施設で死ぬまで暮らすことになつてしまいます。私たち健常者よりは平均的にはるかに寿命が短いんです。」

頭を地面こすりつけるようにお願いしている先生の姿に、大山さんは心を打たれました。「一週間だけ」ということで、

障害を持つ二人の少女に就業体験をさせてあげるようになったのです。

「私たちが面倒をみますから」

就業体験の話が決まると、喜んだのは子供たちだけではありません。先生方ももちろん、ご父兄たちまでたいそう喜んだそうです。

会社は午前八時から午後五時まで。しかし、その子たちは雨の降る日も風の強い日も、毎日朝の七時に玄関にきていたそうです。

お父さん、お母さん、さらには先生まで一緒に送ってきたと言います。親御さんたちは夕方の三時くらいになると「倒れていないか」「何か迷惑をかけていないか」と、遠くから見守っていたそうです。

(5) そうして一週間が過ぎ、就業体験が終わろうとしている前日のことです。

「お話があります」と、十数人の社員が大山さんを取り囲みました。

「あの子たち、明日で就業体験が終わつてしまいます。どうか、大山さん、来年の四月一日から、あの子たちを正社員として採用してください。あの二人の少女を、これつきりにするのではなくて、正社員として採用してください。もし、あの子たちにできないことがあるなら、私たちがみんなでカバーします。だから、ど

うか採用してあげてください」

これが私たちみんなのお願い、つまり、総意だと言います。

社員みんなの心を動かすほど、その子たちは朝から就業時間まで、何しろ一生懸命働いていたのです。

仕事は簡単なラベル張りでしたが、十時の休み時間、お昼休み、三時の休み時間にも、仕事に没頭して、手を休めようとしません。毎日背中をたたいて、「もう、お昼休みだよ」「もう今日は終わりだよ」といわれるまで一心不乱だったそうです。ほんとうに幸せそうな顔をして、一生懸命名仕事をしていたそうです。

（中略）

(6) 幸福とは、①人に愛されること、②人にほめられること、③人の役に立つこと、④人に必要とされることです。

そのうちの②、③、④は働くことによつて得られるのです。

Q この記事の感想を、仲間と話し合ってみませんか？